

令和2年
6月15日・19日・
22日・26日

倉敷市真備支え合いセンター 初任者共通：チームビルディング研修

場を 関係をつくるとは？

「きづく・きく・わかる・みちびきだす・こたえる」ことができるようになろう！

見守り連絡員・見守りリーダー・相談員等の初任者を対象に、被災者中心の支援活動をチームで展開することを目的として、「何のために、何を、誰が、どうやるのか」という、倉敷市における被災者見守り・相談支援がめざす方向と進め方、各職種の役割や支援者としての心構え、関係の築き方の研修を行いました。

オーラを伝えてあいこにするじゃんけんでは、波長合わせの大切さやペーシングの3つの技法を、互いを知り合う活動では聴き方のコツを、体験を通して学びました。

また、被災者や被災地のニーズに応え自立を支援するためには、「再建のタイムラインを見据えつつ、その人のタイミングに合わせることの『いつ（時期・時機）』の判断が重要」「各職種や支援機関が役割分担することの意義、分担しているがゆえに目の前の支援に集中してしまいがちになることから支援の全体像を共有する場や機会が必要」ということを、制限時間内に自立した紙のタワーをつくるアクティビティを通して実感しました。

さらに、発災からこれまで被災者支援に関わってこられた方の経験共有によって、「住まいの状況が被災前の世帯構成と異なり、被災前より孤立感を感じてしまう方が多くいる」「被災直後の経験から、情報がないという事実そのものに不安感を強める傾向がある」といった、地域の特性理解や居住場所や関心に応じた情報提供が求められることを、確認することができました。

発災前・発災時の実態把握調査情報を活かした命を守る取組みや、おひとりおひとりの心情や意向を大切に被災者中心の生活再建促進、被災地の地域社会の助け合いの力を取り戻し今まで以上に大きな支え合いのある地元主体のまち（コミュニティ）づくりにつながる働きかけ、生活者の視点をもつ見守り連絡員と専門的視点をもつ相談員や各種専門職によるチームアプローチ、支援機関間の連携・協働、これらのことを「いのち・尊厳・くらしを “共に” 守る」という言葉に凝縮し、目線を合わせ、支援課題に応じて資源を調整・開発しながら、被災者・被災地の声を大切に “かかわり” をしていくことを共有することができました。



初任者共通：チームビルディング研修

はじめに：波長を合わせる 目線を合わせる

- ・体と心をあたためる
- ・見守り・相談支援事業の目的・役割・目標・方法の共有
- ・研修の目的・目標・進め方・役割の共有

体験：チームアプローチの必要性

- ・ペーパータワービルディング
- ・チームの3つの要素、タックマンモデル
- ・自立の阻害の判断

体験：聴く・聞く 互いを知り合おう

- ・サインとしてのからだの反応を観る
- ・支援関係の形成とバーステックの7原則
- ・心理のプロセスを SPARK でとらえる

対話：経験を学び合おう

- ・地域特性と被災前・被災後の真備
- ・被災された方の “声” から気づいたこと
- ・チームワークの観点からのふりかえり

共有：支援の全体像を確認し合おう

- ・被災当事者と支援関係者のかかわり
- ・見守り・相談支援の流れ、留意点
- ・支援制度、個人情報の保護と活用

共有：チームアプローチ・多機関連携とは

- ・支援関係機関等とその役割
- ・チームで支援するための仕組みと工夫

対話：経験を学び合おう

- ・支援者に必要な姿勢・態度、技法・技術、知識・情報とは
- ・状態像 2020 の視点から支援をふりかえる

おわりに：学んだことを活かそう

- ・発見・継続・中止・試行することの共有
- ・応援メッセージの交換

令和2年
5月25日

倉敷市真備支え合いセンター 課題別：支援型リーダーシップⅠ研修

心をしなやかに保とう！

「ない」から「ある」に目を向けるとは？「貢献と感謝の好循環」を生むことができるようになろう！

倉敷市真備支え合いセンターは、約5,800世帯を約50名体制で支援しています。

訪問活動を主に担う見守り連絡員は、被災された方のもとへ足を運び、傾聴と共感のかかわりを通して支援しています。“不安や悩み、怒りや悲しみ、やりきれなさ”などを日々受けとめる見守り連絡員を支えているのが、見守りリーダーと相談員です。支え方はさまざまですが、支える方法のひとつとして、日々の活動の中での出来事を学びや成長に変え、よりよい支援につなげることができる組織づくりに取り組むこととしました。

そこで、まずは、支える側が互いに各々の考え方やその背景を知り合うことで、互いの強みや良さを活かしあおうという組織の雰囲気をつくるための研修を行いました。研修後は、ケースカンファレンスでも意見が出やすくなり、良い変化が生まれてきています。

課題別：支援型リーダーシップⅠ研修

はじめに：波長を合わせる 目線を合わせる

- ・体と心をあたためる
- ・研修の目的・目標・進め方・役割の共有

体験：自身のかかわりをふりかえろう

- ・人生&支援者としてのタイムライン
- ・とらえ方や反応の傾向をみつける
- ・自分が信じる「べき」を書き出す

対話：互いを知り合おう

- ・エピソードを共有する
- ・気づきを共有する

共有：経験から学び合おう

- ・事実・解釈・行動
- ・チームが成長するための5つのステージ

おわりに：学んだことを活かそう

- ・見守り連絡員を支える／見守りリーダーを支える／ “私の原則” を共有する
- ・感謝のメッセージを交換する



▲タイムラインづくり

編集後記

今年も暑い夏がやってきます。年々暑さが増す中、暑さ対策が大変ですね。最近、街中でよく携帯用の扇風機を持っている人を見かけます。調べてみると、様々な色やデザインのものがあり、値段も手ごろです。性能も思ったより良さそうで、今年はこの携帯用の扇風機を購入しようかと検討中です。暑い日々が続くと体調管理が大切です。上手に暑さ対策グッズを取り入れてこの夏を乗り切りましょう。Y



社会福祉法人 岡山県社会福祉協議会

〒700-0807 岡山市北区南方2丁目13-1
県総合福祉・ボランティア・NPO会館(きらめきプラザ)3 階
TEL.086-226-2830 FAX.086-225-6602
<https://kurashi.fukushikayama.or.jp/>

岡山県くらし復興サポートセンターの事業は岡山県から「被災者見守り相談支援に係わる市町村支援業務」の委託を受けて実施しています。

発行人／岡山県くらし復興サポートセンター

発行日／2020年7月31日

あなたの力になりたい！

くらし復興

サポート
通信

第4号

2020年7月



ももるんじゃー

今回のくらし復興サポート通信は、岡山県内の西日本豪雨の支援に携わる関係機関がどのような活動を行っているのか、今年度どのような取り組みを行うのかを特集しました。

各機関の取り組みを知ること、現在の自分の業務との関係や、どのように関連しているのか改めて確認してみま

しょう。各機関の取り組みを知ること、お互いの業務での連携や、協力体制の構築にも役立つことがあると思います。くらし復興サポートセンターは、復興に向け、関係機関が同じ方向に向いて動ける体制づくりを目指して取り組んでいます。

復興を支える

おかやまこころのケア相談室

平成30年7月、豪雨後に設置

おかやまこころのケア相談室は、西日本豪雨災害後に設置されました。

岡山県内で、豪雨災害により心身の影響が生じた被災者や支援に携わる人に対し、保健所や市町村と連携して相談や助言等を行っています。

おかやまこころのケア相談室は、県域で幅広く相談を受け付けており、また、精神科医が常駐しているので、より専門的な相談を受け入れることができる機関としても機能しています。



被災による心のケアは様々な場面で必要に

現在、見守り・相談支援事業は、新型コロナウイルスのこともあり、十分な活動が行えない状況です。被災された方は孤立や不安を感じられている方もおられます。電話や、訪問時の何気ない声かけが、とても大切だと感じています。

当相談室にも、被災された方から、見守り支援などの地域で活動している方々の訪問や電話での対応に安心するという声や、「次いつ来ますね」「また来週電話します」など次の約束が、嬉しい、勇気づけられているとの声や訪問や連絡を心待ちにしている方の声も届いています。

被災者への見守りや声かけの活動がこころのケアにつながっているのだと実感しています。

おかやまこころのケア相談室は、被災者だけでなく、被災者支援に携わる方の相談機関としての役割も担ってい

ます。支援者のみなさんに、身近な相談機関として知っておいてほしいです。

いつでもご相談ください

被災者支援に携わる人は、我慢強い人が多いように思います。苦しいことや、弱音を吐いてはいけなく…ではなくそんな時はぜひ吐き出してください。我慢せず吐き出すこと、話をする中で、気持ちの整理をすることができ、少し楽になるかもしれません。地域の相談機関は近すぎて言いづらいこともあるかと思いますが、おかやまこころのケア相談室は、相談機関としていつでも支援者のみなさんと身近に繋がっていたいと考えています。ぜひ、お気軽にご相談ください。

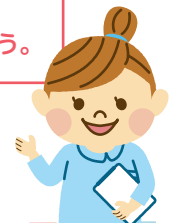
被災者の方だけでなく、援助者の方も、こころのケアに関してのご相談があれば、お気軽にご連絡ください。

岡山県精神保健福祉センター
おかやまこころのケア相談室

TEL. 086-201-0850 (代表)

相談時間：月曜日～金曜日 9:00～16:00(祝日・年末年始を除く)

相手に寄り添ったみなさまの活動が被災者の方々の心の支えとなります。援助者の方も定期的に休養をとり、ご自身の心と身体を気遣ってあげましょう。



令和2年度 岡山県での被災者見守り・相談支援事業の取り組みのご紹介

倉敷市真備支え合いセンター

「一人ひとりにとって身近な支援者になれるように」 倉敷市真備支え合いセンター長 佐賀 雅宏

「倉敷市真備支え合いセンター」では、平成30年10月から今日まで、被災された方々に「寄り添うこと」を大切にしながら、戸別訪問を続けています。訪問の際には、生活上の困りごとなどを「傾聴」し、必要な方には行政サービスや関係機関を紹介したり、生活情報をお届けする等の「つなぎ」を中心とした支援を行っています。

訪問する世帯の中には、健康問題や介護負担、家族関係の悪化、経済的な不安など、複合的な課題を抱えている世帯があります。そのような世帯に対しては、支え合いセンターだけで支援するのではなく、行政の担当課をはじめ相談支援機関やサービス提供機関と連携を図りながら支援を行っています。

また、公的な制度やサービスだけでは対応できない課題に対しては、民間の支援団体や民生委員・児童委員と連携するなど、被災された世帯それぞれの課題に合わせた支援を丁寧につなぎ合わせていくことを意識して取り組んでいます。

被災から2年を経過した現在、真備地区には多くの方が戻って来られています。一方で、町内会の活動が再開していなかったり、回覧板が届かないなど、住民同士のつながりやコミュニティの再建には、もう少し時間が必要だと感じています。

支え合いセンターでは、各世帯を支援する「個別支援」を基本としながらも、住民同士が支え合える地域となるような「地域支援」にも今以上に取り組んでいく必要があると考えています。

これからも被災世帯に寄り添いながら、一人ひとりにとって身近な支援者になれるように、約50人の職員と倉敷市が一丸となって取り組んでいきたいと思ひます。

- 被災者に寄り添った見守り訪問活動
- 被災された世帯に合わせた相談支援機関へのつなぎ
- 個別支援と地域支援



総社市被災者寄り添い室

「お一人おひとりが安心して暮らせる生活再建に向けて」

総社市被災者寄り添い室 生活支援相談員 三宅 喜子

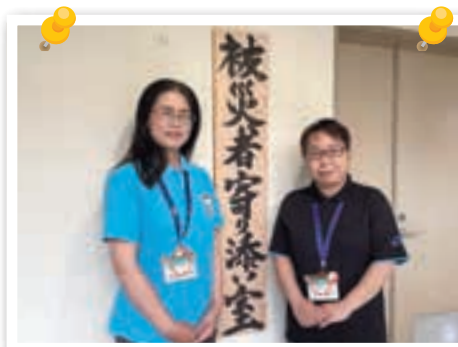
これまで市被災者寄り添い室と市復興支援センターのそれぞれで活動していましたが、令和2年4月1日から市直轄の室で一元的に支援することにより、庁内関係部署とこれまで以上に迅速かつ緊密な連携が図れ、市職員自らが被災者に寄り添い、心の復興に向けた見守りや相談をすることができるようになりました。

本市の最優先課題に位置付けている復興について、被災者に寄り添う復興とし、孤立防止のための見守り支援や日常生活上の相談支援や生活支援、住民同士の交流機会の提供、地域社会への参加促進など行っています。室では地域と市役所がより近く、顔が見える関係を構築し、被災者お一人おひとりのすべての方々の心の復興の実現を目指しています。また、本室では訪問地区を担当制とし、そうしたことで困りごとや話したいことを気兼ねなく話せる環境づくりを心掛けています。さらに、社会福祉協議会や地域包括支援センターなどの関係機関と連携を行い被災地区の情報をより細やかに把握し、地域支援につなげていきます。

被災から2年が経過する中で被災された方の中には住宅再建ができ自宅に戻れた方もいますが、まだまだ見通しが立たない方もいます。住宅だけではなく生活再建に向けて不安がある方など、対象のすべての世帯を訪問し、少しでも、疲れや寂しさが和らぐように支援を行っています。



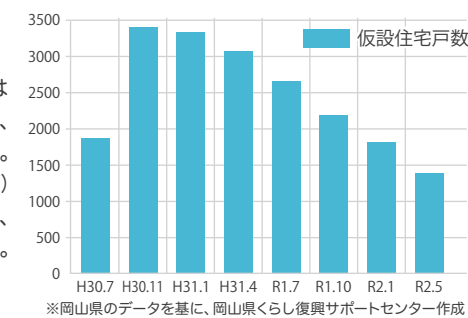
- 被災者の心の復興の実現
- 被災者に寄り添う顔が見える関係の構築
- 市直轄で一元的に支援ができる体制づくり
- 関係機関との連携



岡山県域での取り組み課題

発災から2年経過する中で、住まいの環境が大きく変化

令和2年5月現在、仮設住宅入居世帯数は平成30年11月をピークに減少しているが、現在も多くの方が仮設住宅で生活をしている。(借上型仮設住宅:1,239戸/建設型仮設住宅:147戸)借上型仮設住宅は県内に点在しており、被災時の居住地外で生活している人も多い。(11市町約300世帯)



課 題	必要な取り組み
被災時の居住地外で生活している人も多い	県内どこに住んでいても、必要とする支援が受けることが出来る市町間の連携
被災者の抱える課題も個別化・複雑化してきている	専門職（関係部局や関係機関等）との連携による支援
再建先での生活環境環境の変化に伴う心身の負担や不安、コミュニティ機能の低下	再建先でのコミュニティ機能や地域住民同士のつながりの再構築

岡山県被災者生活支援室

「復興支援のための県の取り組みと課題」 見守り担当 大磯 範之

岡山県被災者生活支援室では、平成30年7月豪雨により被災された方々が一日も早く日常生活を取り戻すことができるよう、「岡山県くらし復興サポートセンター」を設置して、仮設住宅入居者をはじめ、被災された方々の孤立防止のための見守り支援や日常生活上の相談を受ける市町村の取り組みを後方支援しています。

発災から2年が経過し、仮設住宅の入居期限を順次迎えることから、供与期間の延長が必要な方には延長手続きを行うとともに、昨年度から引き続いて生活再建支援金などの支給、災害弔慰金等支給審査会の運営支援等も行っています。また、「平成30年7月豪雨岡山県災害義援金」の募集は本年6月末までとしていましたが、募集期間を延長して引き続き受付をしています。

応急仮設住宅に入居されている方は、ピーク時には3,400世帯を超えていましたが、現在では約3分の2の方が住宅の再建を果たされています。しかし、いまだに住宅再建のめどが立たない方もおられますし、住宅再建が終わればすべてがもとどおりというわけでもありません。被災者の皆さんが安心して日常生活を送っていくことができるように、市町村や関係団体等と協力し、一丸となって支援していきたいと思ひます。



岡山県くらし復興サポートセンター

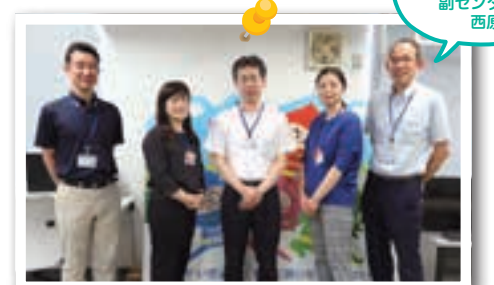
「一人ひとりの安心した暮らしの実現に向けて」 副センター長 西原 俊明

平成30年7月豪雨災害から2年が経過する中で、長年住み慣れた地域を離れ、現在も応急仮設住宅等で生活されている方々がいいます。その中には被災時の居住市町外で生活している方も多く、また、応急仮設住宅の供与期限を迎えることから、必要な延長申立てや、災害公営住宅の入居者決定など、住まいの環境が大きく変化する時期でもあり、時間の経過とともに、被災された方々の抱える課題も個別化・複雑化してきています。

加えて、昨年度末からの新型コロナウイルスの影響により、住まいの再建の遅れや、身近な場所での集いや交流も自粛せざるをえず、先の見えない不安やストレスを感じている方も多くおられます。

そのような中、倉敷市や総社市の見守り・相談支援事業実施センターにおいては、電話による見守りや玄関先での声掛けなど、できる対策や工夫を行いながら、つながりを維持した見守り・相談活動が行われています。被災された方々がそれぞれの環境の中で、安心した生活を営むためには、相談活動を通じて、生活・福祉課題を発見し、その解決に結びつけるとともに、孤立防止等のための見守り活動や居場所・仲間づくりなどの住民相互のつながりをつくる取り組みを一体的に展開していくことが求められています。

県域のセンターとして被災された方々の安心した暮らしの実現に向け、被災者見守り・相談支援事業実施センターの後方支援を行いながら、県域の課題に対しても、行政や社会福祉協議会、関係機関・団体との連携のもと、総合的な支援に取り組んでいきます。



4月より、センターの一員となりました副センター長 西原